

教材研究・井出孫六

『十石峠―秩父事件と地図(長野・群馬)』

深 澤 邦 弘

はじめに

例えば一篇の「小説」の評価をめぐるいろいろな議論されるように、ある「作品」の教材としての価値——どのような課題・テーマ・視点を分析を通して生徒が新しく発掘しうるか、生徒達の既得の価値観にどんなゆさぶりをかけられるか——や読解の方法は常に検討されなくてはならない。

最近、三年生の現代文の授業で「十石峠——秩父事件と地図——井出孫六」を扱っている。教科書(角川)では、作品の後半に省略があるので、全文をプリントして使っている。六段構成、文庫本で二十四頁に及ぶ長篇である。各段の見出しも、原典では(一)、(二)……となっているが、このレポートでは便宜的に第一段・第二段……とした。

内容は、十石峠紀行の部分、秩父事件にふれる部分、それを通して明治の(日本の)近代化を考える部分と大きく三つの柱がたてられるが決して順序だって説明されてはいない。これらが互

に呼応しあって、太い縄のように展開しているので、分析の作業も容易ではなかった。

ここでは、各段ごとに、教室で力点をおいて取り組んだ事項や問題を整理する方法でご報告したいと思う。作品の全文を紹介することは不可能なので、引用が長くなっているがお許しいただきたい。

第一段

○ 峠という文字

「峠という文字の成り立ちについて、あらためて思いをよせることになったのは、秩父事件の跡をたどって十石峠にでむいた折、夏草におもわれた石仏のままで、乱れた息を整えながら、休息をとっていたときのことだった。」——冒頭の一文である。峠という文字の成立を、自分自身の峠をたどる体験を通して実証的に論証しようとする姿勢は、第二段の「この目でとらえてみたい」という記述に重なり、作品の基調となっている視点である。

○ 心のなかの地図の変化と近代化への道標

「あらかじめ描かれていたわたしの心のなかの地図が変化をとげ、それまでぼんやりとしてわからなかった道標が、はっきりと姿をあらわして浮きあがってきたように思われたのであった」

「描かれていた心のなかの地図」とは「旧い参謀本部の地図」(第三段)を基として描いていたイメージをさす。「それまで」

とは十石峠の頂に到着する時までの意。「ぼんやり」としてわから

なかった道標」の「道標」のイメージがすっきりしない。道しるべの意か。道すじの意か。全体として、十石峠への道をたどり、その頂に立つことによつてこの「地図」が変化をとげ、その時までぼんやりとして、「わからなかった」(日本の)近代化への道すじがはっきりと浮きあがってきた、という意に解釈している。この「心のなかの地図」の変化とは具体的にどのようなことか、日本の近代化の道標とはどのような道すじをいうのか。この二つの大きな課題は二段以降、除々に深められていく。

第二段

○ この目でとらえてみたい

「ものごころつくころ、わたしは地平線をこの目でとらえてみたいという素朴な願いに身をこがしたことがある」

ものごころつく頃、「地平線」という言葉を見た。そのイメージを直接自分の目で確かめたいという。秩父事件も幼時期からのこの視点の延長線上の一つであった。はじめて父親からこの事件について聞かされたのは少年の頃である。

○ 秩父騒動

「——明治の昔『秩父騒動』というのがあって、この佐久盆地からも何人かの農民が加わっていった。やがて『暴徒』たちは秩父から群馬をへたのち、十石峠をこえて、つむじ風のようにこの佐久盆地にだれこんできた」

それはこの地方を騒がせたかつてない大事件であり、暴徒たち

は秩父から佐久の地へ疾風のように突出してきた。その中に佐久出身の菊池貫平という大した人物が加わっていた、と聞かされる。しかしこの人物は筆者が生まれた町の出身ではなかった。自分がいろいろの点で町より遅れていると考えていた山寄りの最も返鄙な北相木村の人である。このことが少年にとっては「不都合な知識」であり「ひそかな不満」として残る。

なぜ「大した人物」が返鄙な山村出身であったのか。少年期のこの記憶が再びよみがえってきたのは戦後になってからであり、それまでに「文字の上で」「それ相応に理解したつもり」であったが解けない疑問はいくつも重なっていたのである。なぜ、当時最新の自由民権の思想が、町を飛び越して山奥の村に受け入れられていったのか、なぜ「最も先進的で新鮮な知識の書」がその村に運び込まれていったのか。

これらの問いを懐いて、筆者は十石峠へ向う。

第三段

○ 十石峠紀行。掠神社……屋久（矢久）峠……山中谷……白井の関……十石峠

「わたし」は「秩父盆地から佐久盆地へとたどった道は明治十七年十一月一日から四日まで秩父盆地に実現した『無政の郷』があえなく瓦解して、残党百数十の農民とともに、菊池貫平が」「駆け抜けていったその同じ道」を進む。このコースは参謀本部の地図（五万分の一）がま横に四枚並ぶ広さである。

「かつてない大きな事件」がこゝで簡潔に紹介される。

- 一、明治十七年十一月一日から四日間
- 二 農民達自らが「無政の郷」をつくった
- 三 短期間に崩壊した

- 四 残党百数十名は佐久へ進出した
- 五 リーダーの一人が菊池貫平であった

以下、地図を参照して、秩父困民軍敗走のコースを確めながら、現代の峠路の様子がどのように描かれているか、小さな設問を用意して読みとりたい。

- ・「山村農家の生活のきびしさがあるともいえる」とあったが、かつての「峠道」の現状は。
- ・山中谷の地形の特長と山村生活は。

○ 白井ノ関と軍律

「十国峠の登り口白井ノ関あたりで氷雨はその年の初雪に変わる気配となった。困民軍の軍律は参謀長菊池貫平の起草になるもので」

白井ノ関。木戸口二間半、その左右に十二間の竹矢来がつづく。関守も昼夜ともに農民が詰め「脇道ニテ御座候故、武士方ノ往来ハ御座無ク候」主に信州から塩や米が運び込まれる中継地としてにぎわった宿場の関所であった。（戸井昌造「秩父事件を歩く」による）今は集落の入口の道の傍に関所跡の石標を残すのみ。

困民軍軍律五ヶ条。

第一 今般大事件中、金円其他を私に押領致す間敷事、若し犯すものは斬

明治十六年秋期埼玉県埼玉町村立小学校生

等部	等	初						中						等						高						等	合計	總計	前期比較																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													
		初						中						等						高																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																						
		級六	級五	級四	級三	級二	級一	級六	級五	級四	級三	級二	級一	級六	級五	級四	級三	級二	級一	級六	級五	級四	級三	級二	級一																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	
大里	入間	麗高	企比	見橫	秩父	兒玉	賀美	那珂																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																		
一六九	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八〇	一八

小学校ヲ掲載セル者ナリ

— 32 —

○下欄ノ受験生三百人以上
小学校ヲ掲載せし者ナリ

（下欄ノ受験生三百人以上
小学校ヲ掲載セル者ナリ

[illegible]

第二 事件中、決して婦人に關係致す間敷事、若し犯すものは斬
第三 酒宴遊興は一切致す間敷事、若し犯すものは斬

第四 私の遺恨を以て人を暴害致す間敷事、若し犯すものは斬
第五 総て指揮するものの命令を受けず私に事を為す間敷事、
若し犯すものは斬

蜂起の夜、掠神社の境内に集合した三〇〇〇の農民を前に読み
あげられたという。私的行為の一切を禁じ、酒宴遊興を禁じ、指
揮、命令の遵守を鉄則とする。このいづれに反しても「斬」とい
う厳しい軍律である。この軍律をもつ困民軍が掲げた蜂起の目的
は次の五ヶ条であった。

第一 困窮人ヲ救フ事

第二 金貨掛合示談整ハザルトキハ合衆ヲ以テ打破リ本人ヲ殺
害スベキ事

第三 各村戸長役場ヘ乱入シ奥印帳簿並諸書類消滅致スベキ事

第四 該件張本人タル者捕縛相成拘留ノ節ハ合衆ヲ以テ警察署
ヲ打破リ破檻ノ上拘留人ヲ援ヒ出ス事

第五 国税ヲ除クノ外諸税並学校費ノ廃止ヲ強訴スル事

（『暴徒約定書』田中千弥「秩父暴動雜録」による）

困窮人救済が第一の目的である。以下、行動の対象・方法が具
体的に指示されていく。ここでは第五の「諸税並学校費ノ廃止
ヲ強訴スル事」について資料を紹介しながらふれておきたい。

高野寿夫氏によれば「学校費は生徒三〇人が教員一人分の月給
を負担し、さらに学校資本金や運営に必要なその他の経費をまか
なうもので就学すると徴収され」た。しかも「全県の試験が春秋

に二回あって、落第したらいつまでたつても進級できないしくみ」
であった。教員の給与のみならず、必要経費の全てを父母負担に
頼っていたのである。

前表は事件発生一年前「明治十六年秋、埼玉県町村立小学校生
徒試験一覧表」であるが、県下十八郡中、落第者の割合をみると
秩父郡の七・一％は北足立郡の九・六％に次ぐ高率である。しか
し秩父郡の就学率は「県下最高の七五％を記録し、全国平均を二
二％も上まわ」り、「これにつぐのは外秩父山麓地方の入間、比
企郡など養蚕地帯であり、逆に」最低の地帯は南埼玉・北葛飾郡
などの穀倉地帯であった。つまり、「就学の率最高の秩父をはじめ
養蚕地帯の各郡に落第率も高いという傾向が見い出せる」ので
ある。（『秩父事件当時の郡役所等『教育関係史料』解説』による、
秩父事件遺族会刊行、一九九〇年八月）

「学校費ノ廃止ヲ強訴」し「三ヶ年休校ヲ県庁ニ迫ルコト」と
いう要求がうまれた背景には経済的負担を一方的に強いられてい
たこのような事情があったのである。

○ 峠からの展望

「眼前の上武甲信の四県にわたる展望に目をやりながら、わた
しは、わたしの目から何か一枚鱗のようなものが落ちたような気
分にとらわれていた。長い間の念願がかなって、武州、上州を歩
き、いま信濃境を目の前にして峠のいたゞきに立ったという喜び
に通底されながら、わたしの目から一枚の鱗が落ちたように思わ
れた。それは、ほかでもなく、わたしの頭に描かれていた地図が、

いつの間にか全く別のもう一枚の地図に変貌していたことに気づいたことと通じた。それは、ごく単純なことであった。

第一段の「心のなかの地図の変化」に呼応する部分である。峠への道をたどり、頂に立って上武甲信につらなる山なみを眺めていた時「目から」「一枚鱗のようなもの」が剥がれ落ちた気分にとらわれる。「……ような気分」も「……ように思われた。」とより確かなものに移っていく。この時まで筆者の頭の中に描かれていたイメージは戦前の旧い参謀本部の地図によって醸されてきたものであった。その「地図」が、「全く別のもう一枚の地図に変貌していた」という。そしてそれは極めて単純なこと（地図）の発見であった。

即ち、明治十七年にはこゝ秩父地方には信越線も中央線も小海線も開通していなかった。行政区分も決められていなかった。秩父盆地と周辺地域とは「峠」を介して結ばれ「峠道」は生活の大動脈・ルートとして生々と機能していた時代であったという発見である。「峠を媒介として」「山村は平地の民とさしたる落差なしに平等な知的空間を所有」することができた時代があったという認識である。

鉄道や行政区分が記載されている地図を尺度として、この両者が現実存在していなかったこの秩父地方の明治十七年という時代をイメージする基準にしていたことが、いかに事実に対し、歴史をみる目をくもらせてきたか、鉄道を利用しさえすれば東京に近い、この幼少の頃の優越感がどんなに歪んだものであったか。この幼少期への回想は、第六段の「峠の生命を扼殺した鉄道に象

徴される近代」という記述へとつながり、日本の近代化の道標という課題を考える問題提起ともなっている。

第四段

○ 秩父騒動と電信線切断の戦術

『秩父騒動』の参加者は約一万名といわれているが、事件のあと当局に検挙されたもの三千余に及んだともいわれている。そこに規模の大きさ、事件の重さが語られているのだが、……

参加者約一万名。被検挙者三〇〇〇余名。こゝで事件の規模の大きさと重大さが数字で示されている。供述書からは「治安当局のフィルタ―がかけられているとはいえ」「そこに当時の農民の肉声に近いものをききとることができる」という。蜂起も間近かに迫った「最後の秘かな」会議で「……電信柱等も折挫ク……」という戦術が語られたことがあった。なぜこの戦術を農民の肉声と考えることが可能なのか。電信柱はどうして「折挫」かなければならない対象となったか。

当時、電信柱は既に東京から浦和をへて熊谷まで通じていた。話は少し先へ進むが「明治十七年十一月の電報量は、対前年同月比で七千通も上回」り「寄居に仮設された東京鎮台の電信機は」熊谷……浦和……東京へとひきもきらずに稼働し、事件制圧の武器としての役割りを存分に果たしていたのであった。電信網の全国的整備事業は政府によって文明開化のシンボルとして喧伝されながらも、もう一方ではこのように「軍事・治安の先兵として地方に」はりめぐらされていたのである。

「牛肉拾頭ハ容易ニ集マラズ……」という電文と、「峠によつて苔を喰ひ雨露をすゝつて抗つた農民」と対照されて両軍の食糧事情が書かれているが、経済的な披弊の底に追いつめられていた農民達の目には、この電信柱は自分達の生活を庄殺しようとする要具としてしか映らなかつたのであろう。この情報伝達としての役割をいち早く見抜いていたからこそ、電信柱は戦術的に折り挫かなければならないものであり、拒否すべき対象となつたのである。

自由党史にみえる秩父事件参加者のイメージはこの農民像とは著しく異なる。

「暴挙の原因は既に言へる如く、群馬の奇獄に対する報復にある」と雖も、其囂集せる衆団は素之れ不平の農民、博徒、獮夫の類なるが故に、其勢を得て為す所、多くは官衛を毀ち、吏員を脅かすのみ、証書地券を焼棄し、高利貸、地主を征誅し、金品を掠奪分配し、平生直接の不平を洩すを先にするの傾あり。称して借金党、小作党と言ひ、実是一種恐るべき社会主義的の性質を帯びるを見る。」

(岩波文庫による)

○ 人民如斯蜂起……

「彼レ(菊池)曰ク、現政府ノ施政ハ善良ナルヤ否ヤ御存知ナルベシ。御見掛ケノ通り 人民如斯蜂起セシハ……」

秩父事件という呼び方も当初からこう呼ばれていたのではない。こゝで主に官側資料(電文)によつて「人民」「蜂起」という呼

称をめぐつてみておきたい。

「① 電 報 訳

秩父郡風布村金尾村ノ困民等黨道具ヲ携ヘ小鹿野地方ヘ向ケ押シ出スノ模様アリ早く出張アレ

明治十七年十月三十一日付午後二時五分

寄居警察署

警察本署 至急

(明治十七年十月三十一日二起ル 秩父郡暴徒書類

「秩父事件史料」(埼玉新聞社による。以下同じ)
右の電文が第一報である。日付をおつてみたい。

・秩父郡中ノ村民容易ナラザル挙動ニ付キ 十月三十一日

・……秩父郡村々ノ人民各兵器ヲ携ヘ集合スルノ模様アルニ依リ 十月三十一日

・…… 十月三十一日

・秩父郡中ノ村民多衆集合容易ナラサル挙動有之ニ依リ…… 十一月一日

十一月一日

・秩父郡金崎村山田増吉方ヘ暴徒乱入ノ件ハ全ク確実ナルモノ…… 十一月一日

・…… 十一月一日

・昨三十一日県下秩父郡風布村ニ貧民蜂起シ 十一月一日

・児玉郡金屋村ニ於テ台兵ニ撃退ケラレタル賊徒ハ一時逃走シタ 十一月五日

・…… 十一月五日

・今般秩父郡暴徒屯集ニ付 十一月五日

・……今般秩父郡兇徒事件ニ付 十一月五日

・今般蜂起之暴徒等不容易挙動ニ付 十一月五日

・残徒捕拿之儀ニ付…… 十一月六日

・兇徒平定之儀二付：

十一月八日

・暴動事件に關スル：

十一月九日

・管下秩父郡暴挙之賊徒等漸ク鎮定：

十一月九日

・今般秩父郡暴動之際

十一月十四日

「困民」「人民」「村民」とみえるのは十月三十一日・十一月一日の兩日で、以後は、「暴徒」「貧民」「賊徒」「殘党」「兇徒」という呼称になり「暴徒」という表現が定着化していく。「蜂起」も「押シ出スノ模様」「容易ナラサル暴動二付……」と伝聞を記録する字句から事件の推移や規模が詳細に判明するにつれ「兇徒事件」「暴動事件」「暴挙」「暴動」とかわっていく。当初には、「騒動」という語はみられない。堺 利彦は昭和二年に発表した紀行「当てなし行脚（其二）」（中央公論七月号）の副題に「百穴―田植―秩父騒動―長壽」と書き、翌昭和三年「秩父騒動」（改造十月号）を発表している。

○「否ヤ」と「否ナ」

「……現政府ノ施政ハ善良ナルヤ否ヤ御存知ナルベシ……」先にみた菊池貫平の発言である。この「否ヤ」の部分が「秩父事件資料」では「……善良ナルヤ否ナ御存知ナルベシ」とあり、強い否定表現になっている。

第五段

○峠からの展望——東京へのルート——

「十石峠だけではない、大河原峠、十文字峠、^{つが}柵峠、三国峠、

信州峠など、いくつもの峠道を地図の上に復元して眺めてみれば、わたしが幼少のころ、時間の上で東京と最短コースで結ばれていることによって、わたしの生まれた町を佐久のミニ東京と考えていた地図は、色あせたものになってしまった」

今日の地図で秩父盆地を囲む山塊の中に「峠」を数えてみても三十を越える。四方八方へと通じていたこの峠道が大動脈として機能していた時代の地図を眺めて、筆者は「生まれた町」から各地への距離を測っていく。ことに秩父・東京・横浜への「地図上の距離」は自分の町よりも、「山奥の辺境と考えていた北相木村の方が」ずっと近いことを発見する。鉄道を使えば自分の町は東京へ最短コースで結ばれている、これが少年の頃の優越感の一つであった。しかし、峠道をたどってその距離を比較してみると山奥の村の方がそれらの地に近いではないか。

そのコースは、「北相木村……^{つが}柵峠……十石峠……山中谷……新町又は倉賀野……江戸……横浜」と想定されている。北相木村から直接柵峠を越えて、白井の関、山中谷へのコースは未確認ということであつた。

第六段

○近代化への道標

鉄道の「上り」「下り」という呼び方に混乱を覚えたという幼時期の体験の記述にはじまる導入は新鮮。

「全国規模でこの『上り』『下り』の線が地図に引かれていたのは、」「文明開化のもうひとつのシンボルである鉄道工事に

よってであった」「それは容赦なく峠にトンネルを鑿^{うが}つたことでそれまで自然と人間の交感において保たれていた峠の生理を破壊して進み、人間の精神の地図にまで上り線と下り線を引き入れてきたように、わたしには思われるのである。人は争って上り切符を手に入れようとして生きてきたし、いまもおその基調は変わっていない」

ではこの鉄道工事が峠に囲まれている地方にどのような影響・波紋を投じたか。結論からいえばその地方と峠を介して結ばれていた周辺地域とのバランスを崩壊させ、さらに、「人間の精神の地図」に「上り線と下り線」の意識をひき入れる結果となった、人々は競って「上りの切符を手に入れようとして生きてきたし」今日の社会においてもこの基調は変わっていない、という。

地方で人々が「田分け」―「戯け」とよばれる生き方を避けるためにはこの鉄道を利用して都会をめざすしか選択の余地はなく、競争して上り線に乗って大都会に活路を見い出そうとする。かつては「健脚を条件として、峠を媒介として、明治十七年の山村は平地の民とさしたる落差なしに平等な知的空間を所有していたと想像することは、さしたる見当ちがいでないはずだ」(第三段)という関係もみられたのである。この両者のバランスの場に、落差意識と上り線志向は「鉄道」によって容赦なく持ち込まれてきたのであった

「地方」切り捨てと「中央」(大都会)志向はワンセットであり、ここに「この国の近代の思想の地図」と近代化の道すじを筆者はみる。近代をみつめることによって現代の課題も鮮明となる、

現代を考えるためには近代をみなければならぬという巨視的な視点がここにある。

○ 天下の貧富をして平均ならしむ

「……彼の富裕の徒輩は飽食煖衣逸楽を事とし、嘗て貧民の困窮をも顧ず、益す暴富を極む。依て拙者等は、富者に奪ひて貧者に施し天下の貧富をして平均ならしむと欲する者なり。」

菊池貫平の発言である。この拙者等の世の「貧富をして平均ならしむ」という平等意識には「天の斯の民を任ずる彼れに厚く此れに薄きの理なし」という強韌な平等思想の裏打ちがある。このヨーロッパの近代思想を「拙者等」はいくつもの峠を越えて運ばれてきた多くの書物を通して学んでいたのであろう。平等思想を学んだ拙者等は、困窮状況を打開するために長年続けられてきた秩父の人々の清願行動をも拒否し、貧富の不平等を容認していた当時の権力とその尖兵に対しては正面から対峙していかなければならなかった。

○ 電信と電灯

「十石峠に向かう道筋、秩父の山中にある集落で……」第一段の冒頭に呼応して、再び場面は十石峠へ向かう峠道にもどる。その集落の古老の話によれば、秩父地方に電灯が灯ったのは電信に遅れること半世紀「昭和の二十何年かであった。」いかに峠の人々の生活が置きざりにされてきたか、その実例の一つであろう。

「明治の初めこの国が近代を歩み初めたとき、峠の民はその近

代の歩みの跛行のなかに峠をおきざりにし、峠を扼殺する相貌をみてとったのではないだろうか。秩父事件には峠の民の抗議の声がこめられていた」

最後のこの一文に秩父事件の本質が凝縮されているように思う。明治十七年、政府の経済政策に翻弄されながら、その土地で生活を拓こうとする人々の要求と権力を扼殺しようとする権力に対抗して、近代思想を学び平等意識に目ざめた人々の生命がけの怒りの抗議がこの事件であった。

終りに

秩父事件を追って十石峠へ向う。峠の頂に立ち上武甲信の山々を眺望しながら、まだ鉄道などが敷設されていなかった頃のこの地方の「地図」を復元して「峠」の役割について考える。政府によって文明開化のシンボルとして喧伝された電信・鉄道の全国整備の目的と影響に言及し秩父事件を通して日本の近代化の道すじを考えていく。

こうして分析してみると、紀行の部分、事件について説明している部分、近代化の道すじに関わる部分、この各々が呼応しながら展開してきているが全ては「秩父事件を通して日本の近代化の道すじをみる」という一点に集約されているように思う。

落差意識、地方切り捨てと中央・上部志向、ともに今日の日本の社会にみられる固定的な価値観である。その淵源は人々の平等意識が扼殺されていったこのような過程にあり、秩父事件はその象徴であった。この事件についての説明は、幼少期の記憶、十石

峠へ、その頂に立つ、峠を下る、と峠道を歩むにつれて各々の地を背景に一つ又一つと漸層的な深まりをみせていた。

昨夏、秩父から佐久へ困民軍敗走のこのコースを歩いてみた。

屋久（矢久）峠を越えた北側の森林地帯の中で廢道になって久しい旧道に出会った。神流川沿いの道は、道巾も拡げられ、新しい隧道がいくつもつくられていた。十石峠の頂から佐久への道は完全に舗装された車道になっていた。遠い町への通勤もこれで容易になったともお聞きした。明治初期の鉄道網の全国的な整備が近代化のシンボルであるなら、今日、全国規模で企画され現実化したところある交通網——新幹線・高速道路——の整備は現代化のシンボルといえようか。

明治の歴史的な事件の経路と終焉を通して、現代をみつめ直す多くの視点を新しく発掘しうる点においてよい教材である。そのためにも、我々の日頃の実践を互いに話しあう協同討議は欠かせないと思う。

この小論もその成果のご報告である。

一九九一・一・一七

テキスト

『歴史紀行 峠を歩く 井出孫六 筑摩文庫』

東京都立昭和高等学校